

種 名 イヌタデ  
万葉時代の呼名 たで・蓼



詠人 作者未詳 万葉集卷十一 二七五九

わが屋戸の穂蓼古幹採ぬ生し  
実になるまで君を待たむ

### 【現代訳】

わが家の穂蓼の振る手茎から実を取って蒔いて、それを育ててまた実がなるまでだって、あなたを待ちましょう

### 【イヌタデの解説】 タデ科の一年草

茎の基部は横に這い、多く枝分かれして小さな集団を作る。茎の先はやや立ち、高さは20-50cm。葉は楕円形。秋に茎の先端から穂を出し、花を密につける。花よりも、その後に見られる真っ赤な果実が目立つ。果実そのものは黒っぽい色であるが、その外側に赤い萼をかぶっているため、このように見えるものである。赤い小さな果実を赤飯に見立て、アカマンマとも呼ばれる。雑草ではあるが、非常に美しく、画材などとして使われることもある。名前はヤナギタデに対し、葉に辛味がなくて役に立たないために「イヌタデ」と名付けられた。